

二人が生まれた時代

二人が生まれた天保年間及び 1840 年代以降は、それまで米・塩・木綿・酒・油・蠟といった大坂を經由して行われていた取引が、各地方の殖産興業が向上して新しい流通が生まれ、豪商と呼ばれる大商人が誕生し、日本の経済をダイナミックに動かすようになっていた。

江戸に目を向けると米・醤油・酒といった商品が近隣の生産者によって、下り物に劣らない良質の物が生み出されるようになった。天保の改革で、水野忠邦が松平定信の追従をして「江戸にいる近在農家からの働き手に国へ帰れ」と奨励しても聞く耳を持たない。すでに江戸は楽しいことがいっぱいあって、おいしい食べ物が手軽に食べられる花の都だったのだ。

すでに日本の沿岸には外国船がうろうろするようになっていたが、慌ててうろたえるのは幕府の偉い人や国元の大名達だった。

しかし江戸の庶民は意外とノー天気、旅行や歌舞伎や見世物といった娯楽を享受し、面白い本や浮世絵などの流行を楽しんでいた。また時代を映す流行歌も生まれました。

「江戸のしりとりに唄」

牡丹に唐獅子 竹に虎 虎をふんまえ 和藤内
内藤様は さがり藤 富士見西行 うしろ向き
むき身蛤 ばかはしら 柱は二階と 縁の下
下谷上野の 山かざら 桂文治は 噺家で
でんでん太鼓に 笙の笛 閻魔はお盆と お正月
勝頼様は 武田菱 菱餅 三月 雛祭
祭 万燈 山車 屋台 鯛に鯉に 蛸 鮪
ロンドンは異国の 大港 登山駿河の お富士山
三べんまわって 煙草にしよ 正直正太夫 伊勢の
こと
琴に三味線 笛太鼓 太閤様は 関白じゃ
白蛇のでののは 柳島 縞の財布に 五十両
五郎十郎 曾我兄弟 鏡台 針箱 煙草盆
坊やまいいこだ ねんねしな 品川女郎衆は 十匁
十匁の鉄砲玉 玉屋は花火の 大元祖
(博多どんたくテーマソング)

二人の出生

◆山岡鉄舟 1836年(天保7年)

幕府認定の剣術「一刀流」の流派、「小野派一刀流(元祖小野忠明)」の正統を組む小野朝右衛門の4男として誕生。母は鹿島の塚原磯*女。10歳の時、父の高山郡代赴任に伴い飛騨へ赴く。この地で鉄舟の代名詞となる「書」、「剣」を学ぶ。17歳の時父が亡くなり(前年母死亡)、弟たちを連れ江戸へ戻る。家督は異母兄鶴次郎が継いでいたのでそこに身を寄せる。**ぼろ鉄時代**

*鹿島神道流塚原ト伝の末裔

◆三遊亭圓朝 1839年(天保10年)

父は武家の出であったが、遊び好きで武士が務まるような性格ではなく、左官業に就くも身につかず橘屋圓太郎として二代目三遊亭圓生門下の噺家となる。

圓朝(本名:出淵次郎吉)は江戸湯島で生れる。幼い頃から、父の姿を見て育ち、天性の才能が芽生え、大人顔負けの話芸を披露し、数えの6歳で小圓太を名乗り評判を得る。10歳で二つ目。

●当時の落語

江戸落語は「芝居噺」、「怪談噺」が人気で寄席小屋は庶民の娯楽として定着していた。音曲入りや芝居仕立ての書き割り入りなどで賑わっていた。

20歳になった圓朝も鳴物入り道具仕立ての芝居噺で評判になる。25歳の時怪談『牡丹灯籠』を発表し、翌年には名席・両国垢離場で真を打つ。

大政の移譲に貢献する鉄舟

平和的な大政奉還のために官軍に恭順の意を表す徳川慶喜の思いを伝えるために鉄舟は単身駿河へ向かい西郷隆盛に談判し、江戸城の無血開城を果たす。

●版籍奉還の旧幕諸藩のために尽くす

維新後、鉄舟は新政府下の徳川静岡県の権大参事になり、旧幕臣の処遇処置に奔走する。その成果は新政府の目に留まり、旧態然としたままの茨城・伊万里県の改革に尽力する。

●西郷に請われ明治天皇の侍従となる

西郷隆盛は、15歳の明治天皇に剣術や学問を指導したことから、師弟関係を築いていた。天皇も、西郷の義理堅さと実行力に大きな信頼を寄せていた。

その西郷のたつての依頼により、10年の期限を約し、明治天皇の侍従となる。この頃参内のない日には三島の龍沢寺の星定和尚について参禅する。(東京より歩いて三島に3年間通った)

●粗暴な明治天皇を押さえつけ信頼を得る。

明治天皇は自分のまわりに侍女を置かず、男ばかりの侍従を置いていた。酒が好きで、酔っては彼らを相手に相撲に興じ、侍従たちを困らせていた。ある時、無理やり飛びかかってきた陛下をいなし、うち伏せた鉄舟は、陛下をいさめたことから逆に陛下からの信頼を得る。

明治の一新に落語界をけん引する圓朝

●上野戦争の最中も寄席まわりに多忙な圓朝

江戸から東京になった街の暮らしは変わらず、寄席の世界を背負って立つようになった圓朝は、柳橋の芸妓「お幸」を妻に迎える。35歳になり、高座スタイルを「素噺」に転向する。

当時明治政府は農民運動や民権運動などで不安な世相を鑑みて、風俗を乱す内容の演目や小屋を暗くして演じる怪談物を寄席で演じることを取り締まるようになった。

●圓朝の名を後世に残す創作と言文一致

圓朝は外国の文芸やニュース性のある話などを自ら筆をとり新作噺を次々に発表していた。

・修身の教科書に載る「塩原多助一代記」

「牡丹灯籠」など圓朝が残した速記本は言文一致を模索する二葉亭四迷などに影響を与えた。

正岡子規／夏目漱石／村上春樹

鉄舟・圓朝二人の出会い

圓朝は陸奥宗光の父伊達自得居士に禅を学んでいた時、高橋泥舟・山岡鉄舟を紹介される。

鉄舟は「お前さん、講釈が上手いそうだが一つ聞かせてもらえないか？」

「お安い御用で、何をやりやしょう」

「そうだな、家には子供たちもいる。桃太郎でもはなしてくれないか？」

おとぎ話はやったことはあるが、桃太郎は話したことがない。こっちはプロだとの思いもあり、鉄舟の家族の前で弁舌に物を言わせて話した。

ところが鉄舟がいうには、お前の話は口で話すから肝心の桃太郎が生きてこない。こう言われた圓朝はムツとするものの、その後「口で話す」と言われた言葉が耳から離れない。鉄舟の勧めで禅を学び、鉄舟と共にし適水禅師に参じたおり「無舌」の悟りを開く。

劍禅一致の道を歩む鉄舟

宮中の務めは天皇・皇后の信頼も厚く、行幸の供や勅使として奈良へ赴くなど、宮内大丞、宮内大書記官と重用される。こうした中も天龍寺適水禅師に参禅するなど禅の道を究める努力を惜しまなかった。また剣道の修行も一段と高まり、禅の心を秘めた「無刀流」の道を開いた。

二人の別れ

〈鉄舟〉明治15年、10年の勤めを終えた鉄舟は、その功績に対する褒賞や慰労金を、谷中にあった廃寺を購入し、戊辰戦争に国のために準じた人々の冥福のために全生庵を建立した。また四谷仲町にあった旧幕臣の屋敷を住まいとし、剣道場「春風館」を開いた。

〈圓朝〉寄席の不況が続く中、圓朝は作品の出版や作品の歌舞伎上演などで大所帯の一門を食わせていくために奮闘していた。

〈鉄舟の最期〉宮中を離れて5年、腹部に不快症状が現れる。明治21年7月18日、危篤状態に陥る。200人程の見舞客が見守る中、鉄舟は圓朝に落語を所望する。7月19日午前9時結跏趺坐の禅を組んで往生する。享年53歳。出棺7月22日午後1時。大雨の中全生庵に参列者5000人。



鉄舟座脱の相 中田誠実画

■参考資料

春秋社 「山岡鉄舟」大森 曹玄 2022年刊
ちくま学芸文庫 山岡鉄舟先生正伝 おれの師匠小倉鉄樹 2021年刊
岩波書店 「文学増刊 圓朝の世界」 2000年刊
吉川弘文館 「三遊亭圓朝と江戸落語」 2015年刊